

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580014

研究課題名(和文) 19世紀イギリスにおける「性格の科学」の展開

研究課題名(英文) 'Sciences of Character' in Nineteenth-Century Britain

研究代表者

川名 雄一郎 (Kawana, Yuichiro)

早稲田大学・高等研究所・准教授(任期付)

研究者番号：20595920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀イギリスにおける「性格の科学」の分析をおこなった。具体的には、中産・上流階級にまで大きな影響力をもっていた骨相学、教育の重要性を強調し労働者階級に広く受容されたオウエン主義、およびこれらに対抗するものとしてJ・S・ミルによって構想されたエソロジーという3つの潮流を取り上げ、これらを相互の影響・対抗関係を念頭に置きながら検討することによって、「性格の科学」の理論的特質、「性格の科学」をめぐる歴史的な文脈を描き出すこと、さらに19世紀イギリスという具体例を通じて、「科学と社会」のあり方について考察した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I aim to exhibit the intellectual context of early and mid-nineteenth-century Britain, in which several attempts to establish 'Sciences of Character' were appeared. I take up Phrenology, Owenism, and Ethology as the subject-matter for the research, and clarify (1) the theoretical aspects and significance of the Sciences of Character and (2) the intellectual and social relationships between them. Furthermore, I discuss the relationship between science and society, employing 'Sciences of Character' as an insightful example.

研究分野：思想史

キーワード：性格の科学 骨相学 オウエン主義 エソロジー

1. 研究開始当初の背景

19世紀イギリスでは、人間の性格はどのようにして決まるのか、それは生得的で修正不可能なものなのか、それとも後天的で修正可能なものなのかという問題について活発な議論が行われ、様々な「性格の科学」の試みが現れていた。それは、産業革命や民主主義の進展によって社会的影響力を拡大してきた中産・労働者階級が、その地位に見合った「徳・倫理」をいかにして身につけることができるのかという関心の高まりを反映したものであった。

19世紀イギリスにおける「性格の科学」の研究としては、いくつかの研究成果があるが、それらの研究はいずれも、現代から見て明らかに疑似科学である骨相学が19世紀イギリス社会においてどのようにして広範に普及していったのかという関心に基づくものであった。また、オウエン主義的性格形成論については経済思想史や教育史において、その環境決定論という特徴について簡単な言及があるのみであるし、エソロジーについては(以下に記す申請者の研究以外には)本格的な研究は存在していないのが現状であった。

申請者自身の研究については、本申請課題に関係するものとして、2010年に公表した論文'Making the Invisible Human Character Visible'において、骨相学の機能局在論という理論的特徴と、それが現代脳科学に対してもっている意義について分析した。さらに、2012年に公刊した『社会体の生理学』のなかで1章を割いて(第7章「性格形成の科学」)、J・S・ミルのエソロジー構想について理論的検討をおこなった。しかし、いずれも「性格の科学」という知的現象の一端を検討したのみで包括的な分析にはいたっていなかった。

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえた上で、本研究では、19世紀イギリスにおける「性格の科学」として、

中産・上流階級にまで大きな影響力をもっていた骨相学、教育の重要性を強調し労働者階級に広く受容されたオウエン主義、およびこれらに対抗するものとしてJ・S・ミルによって構想されたエソロジーという3つの潮流を取り上げ、これらを相互の影響・対抗関係を念頭に置きながら検討することによって、「性格の科学」の理論的特質、「性格の科学」をめぐる歴史的文脈を描き出し、19世紀イギリス思想史について新しい知見をもたらすこと、さらに19世紀イギリスという具体例を通じて、「科学と社会」のあり方について議論し、現代脳科学を取り巻く諸問題について考察することを目的とした。

この研究は、骨相学、オウエン主義、エソロジーそれぞれについての個別研究を積み重ねるわけではなく、これまでの研究のなかで着想にいたった「19世紀イギリスにおける性格の科学」という独自の観点から、これらの理論の間の影響・対抗関係およびこれらを生み出した19世紀イギリスの知的・社会的状況を描き出す試みであった。また、このことを通じて、現代における「科学と社会」の関係を考え、現代の世界で急速に進展しつつある脳科学の社会的・文化的・倫理的問題を考える上で重要な示唆を与えることを目的とした。

3. 研究の方法

「性格の科学」という視角の設定

本研究が具体的な検討対象とした骨相学、オウエン主義、エソロジーについては、これまで多少の個別研究はそれぞれにあるものの、これらの科学の相互の影響・対抗関係を念頭に置きながら統一的・俯瞰的な視座で、また、これらの科学を生み出した19世紀イギリスの社会的コンテクストへ十分な注意を払いながら研究した例はこれまでになかった。その意味で「性格の科学」という新奇な視角を設定することによって、これまでになかった観点から19世紀イギリス思想史の読み替えを図った。

一貫した方法の適用

本研究では、思想を取り巻いていた歴史的コンテキストを重視するコンテクス主義という方法論に自覚的に基づいて「歴史的再構成」という作業を遂行した。いわゆるコンテクスト主義に基づく歴史的再構成という本研究において、「思想」として検討の対象とするのは、単に著書や論文、書簡などの書かれたテキスト(言語的テキスト)だけでなく、実践的な活動(非言語的テキスト)もふくめた広い意味での人間の知的活動全般である。そして、このような思想を「歴史的」に再構成するというのは、思想をそれを担った思想家が実際に生きていた状況や背景(歴史的コンテクスト)において生み出され、それらによって特徴づけられる具体的・個別的な知的営為とみなし、その具体性・個別性を明らかにすることを目的とするということである。

本研究では、イギリスの諸機関に所蔵されている未公刊草稿や関係文書の調査および分析を重視した。未公刊資料を網羅的に検討することによって、公刊文献の検討にとどまっていたこれまでの個別の「性格の科学」についての研究では描ききれていなかった、19世紀イギリス思想史の歴史的再構成をおこなうことが可能となると考えたからである。

4. 研究成果

以下に概要を記す研究成果については学会報告をおこなったうえで論文・著書の形でまとめた(なお、論文執筆・投稿の段階でまだ公表されていない論文・著書がある)。

骨相学は、19世紀前半のヨーロッパ、とりわけイギリスにおいて広く普及していたが、このことに決定的な影響を持っていたのは、骨相学の創始者として理論的枠組を提唱したガルではなく、ガルの弟子ではあるがその理論に重要な点で変更を加えたシュプルツハイムおよびコームであった。本研究では上記の三者の関係および理論上の異同を詳細に検討

し、骨相学という知的体系がもっていた多様な側面を分析した。とりわけ重要なのは、骨相学をめぐる論争において、医師であったガルが解剖学や生理学に関する専門知識を用いながら理論を展開したのに対して、医学的バックグラウンドをもちつつも生理学・解剖学に関心の薄かったシュプルツハイム、および医学的なバックグラウンドをもたなかったコームの議論はもっぱら骨相学の社会的・教育的効用をアピールするものであったという点である。

また、骨相学とオウエン主義の関係についても分析をおこなった。この2つは決定論という立場を共有していたこともあり、両者の中で論争が盛んになされていたことから考えられる以上に理論的立場は近いものであった。また、両者の間には緊密な人的ネットワークが存在しており、お互いに相手の理論を自らの理論をよりよいものとし、より普及されるために利用することができるものであると考えていた。

これらの研究成果については、経済学史研究会(2016年12月)および日本イギリス哲学会(2017年3月)で口頭発表をおこない、現在論文にまとめているところであり、さらに著作としてまとめる予定である。

次に、骨相学から大きな影響と受けたとしてその関係がしばしば注目されてきた19世紀の犯罪人類学については、隔世遺伝によって獲得される一定の身体的・精神的特徴を具備した人間は必然的に犯罪をおこなうとする、ロンブローゾによる「生来性犯罪人説」を取り上げ、骨相学との関連について一次文献に基づいて検討した。ロンブローゾによる骨相学への高い評価の内実を検討するとともに、ロンブローゾの理論形成にとって進化論をはじめとする19世紀後半に現れてきた新しい思潮のもっていた意義を検討した。当時の知的コンテクストのなかに位置づけると、骨相学からの影響は絶対的なものではないことが明らかとなる。この研究成果を取り込んだ英語論文について現在査読誌に投稿準備中である。

さらに、ミルのエソロジー構想については、ミルの思想体系における意義を明らかにするとともに、その構想が19世紀のイギリスの「性格の科学」をめぐるコンテキストのなかでもつ意味 極端な決定論的性格論への反発を明らかにした。この研究成果については、英語単著(近刊予定)の一章としてまとめた。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

川名雄一郎「19世紀前半のイギリスにおける決定論的性格形成論」、経済学史研究会、2016年12月3日、関西学院大学

川名雄一郎「19世紀初頭のエディンバラにおける骨相学」、日本イギリス哲学会、2017年3月28日、南山大学

〔図書〕(計1件)

Kawana, Yuichiro, *Logic and Society*, Palgrave Macmillan, 2017 予定

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者

川名雄一郎(Kawana Yuichiro)
早稲田大学・高等研究所・准教授
研究者番号：20595920

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()